

子豚育成上の問題あれこれ

十勝農業試験場

太田 竜太郎



みごとに揃った子豚、どうして育てるのか、その対策は？

豚は、元来強健、多産性のものであるから、生産の目標もかなり高い。その指標の数字は、年間分娩回数二・五回、年間産子数二〇頭以上、年間離乳子数一八頭以上になっている。牛馬や綿羊なら、年間一頭の産子でも矛盾を感じないが、豚では年間一〇頭やそこらでは、豚仲間入りすることはできない。

肉畜としての条件は、多産性の他に、早熟、早肥、飼料の効率がよく、骨や内臓のわりに肉の部分がよく、そのうえ、肉質もよいことなどである。豚はこの大変ぜい沢な注文をほぼ充たす如く改良を進められている。

わが国でも、これらの条件を詳かにするため、先進畜産国に後れ馳せながら、産肉能力検定事業もどうやら軌道に乗って、品種論も次第に落着いてきたようである。

さて、最近の養豚界が、いかなる方向で、品種の問題や、飼養管理の技術が改善されてきたか、就中、育成率の向上対策を中心にして考えてみることにする。

一 丈夫な子豚を産ませるのには

多産であっても、出産時の子豚が大きく、活力に富んでいなければ、育成途中の管理がよくても、育成率の向上、離乳時の斉一度を保つことはできない。

丈夫な子豚の出産を期するには、まず母豚の強健なこと、妊娠中の管理がよいこととで決定する。

①母豚の管理

週のぼつ 母豚の健康を左右する管理

一言にして言えば、適正な飼養管理ではあるが、その中でもよく言われながら、実行されていない点は、母豚の運動、放牧である。運動の意義は、言うまでもなく、日光浴によるカルシウムの代謝を促進する点と、母豚の体調を整え、胎児の発育、母豚の過肥の防止、腰脚の筋肉を強くして、分娩、泌乳時の子豚の圧殺を防止する体力を蓄積することになる。また分娩後の泌乳する乳汁の成分にも間接的に関連する。

夏の白クローバやラデノクローバの放牧、冬季間の家畜用根菜の給与と実行している繁殖豚経営者は、裏付けする資料には欠けるが、よい育成成績をあげている例が多い。クローバ根菜の採食量は、良質なもので、体重の一〇％程度が限度である。摂取栄養量は、最高三〇％を充足するに過ぎないが、放牧中の土を啄食するのも併せて、ミネラル中の不明な因子が、分娩後の子豚の生育を左右する働きをするものと考えられている。

最近の市販配合飼料は、用途別に、質的にも研究されてきたので、妊娠豚の飼料も、前期、後期に分けて、規準通りに、給与すれば、過不足なく充足されることになり、前述の如く、青草や、根菜類の如き、せんいの多い自給飼料を併用することが望ましく、配合飼料のみ単用では、排泄するふんの形状が、コロコロとした便秘性のもとなり、健康管理上好ましくない。

②繁殖豚は雑種豚が強健である

管理の面ばかりではなく、母豚生来の体質が強健でなくてはならない。品種の要求

も、最初に述べたように、需要者の嗜好の要望から、脂肪の少ない肉質を好むようになり、また経済性の追求から、飼料効率の高い大型種を中心とした品種と変わってきた。すなわち、パーク、ヨークのごときポークタイプの純粋繁殖から、ランドレースを母体とするベークンタイプに二、三種の大型種を交配した二代雑種を母豚として供用する、雑種豚時代になつたのである。いうまでもなくFi(一代雑種)の母豚は、強健で、多産性であり、泌乳能力も高くあるべきではあるが、ただし、雑種繁殖の基礎たるべき両親の純粋種が性能のよいことが条件である。また大型種は、育成の途上において、従来のポークタイプのものより、一層運動を強化していかないと、性来の特質を発揮させることはできない。

大型種による雑種母豚の養成には、なお考究すべき問題がある。母豚のFi、そのFiに交配する第三の品種を何にするべきか、それらの問題は大体詰まってきたのである、その交配の方法、組み合わせ順序が決定しても、最低二つの条件を、生産者は理解する必要がある。

その一つは、三元交配ならば、常に三つの品種の血液を維持するために、純粋種の雌雄をどこかで、準備し、しかも近親交配にならないように、種雄の交換、導入を必要とし、併せてその質も、ただ単に、雑種を作る目的のみではなく、両親の形質を子供に再現する、遺伝力が優秀であって、強健にして、両親の持つよい形質を受け継がなければ意味がないのである。その基礎と

なる品種の純粋繁殖事業、どちらかといえ
ば、縁の下の力持ちの役割を誰がはたすか
の問題である。かような組織が充実され
て、理論が実行に移される時代が到来する
のである。次の問題は、Fiの母豚たるべき
子豚は、どのFi子豚でも、雌であれば、繁
殖用に供されるのではなくて、形質が分離
して産まれてきた子豚のうちから、将来有
能な母豚となりうる素質を洞察する、選抜
能力を持たなければならぬ。

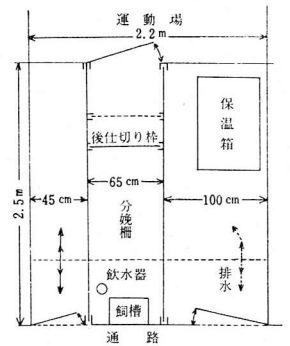
しかし、子豚が扶与された天分を十分に
發揮しうる、育成管理の裏付けがあつて
も、一人前の繁殖豚となるまでには、第一
回、第二回と選抜淘汰は繰返される。初産
の時点においても、産子数が六頭以下と
か、哺育成績の不良なものは、多産性能力
に欠けているとみて、淘汰の対象となしな
ければならない。以上の如く、雑種繁殖に
は、前提たる組織と飼育者の能力が要請さ
れる。

最近では、業者のなかでも繁殖、肥育部門
が分業化されつつあり、組織の要請もあつ
て、団地化が進められているので、徐々に
雑種繁殖時代も軌道に乗ることであろう
が、種々困難な問題が残されている。

二 育成率向上の具体策

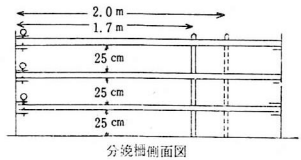
生産時の子豚が健全であつても、離乳す
るまでに、各種の原因や事故で死亡する。
その死因の主なもの、圧死、下痢、寒さ
によるもの、泌乳の不足による栄養失調な
どで、その中でも七〇〜八〇%を占める死
因は圧死である。

第1図 分娩柵の構造と分娩房内の配置



① 分娩柵（第一回）の利用で子豚の圧死は防げる

圧死も分娩後一週間までに集中するが、
分娩柵を利用すると、事故を非常に減少さ
せることができる。従来のような、壁から
三〇センチくらい離して設けた、保護柵ではな
くて、いちばん危険な母豚が回転するのを
防止するため、豚の両側を三段の水平棒の
柵で固定して、母豚が前後の運動と起居運
動のみが可能で、回転することのできない
よう、肩の幅の両側一〇センチの間隔の柵の中
央に母豚を封じ込める方法である。危険な
一週間の時期を過ぎて、子豚の脚がかなり
丈夫になった時点で、保温箱の反対の横柵
を除いて、母豚を解放する方法である。こ
の技術が普及しなかった時代には、少なく
とも三日〜四日は、徹夜で、一時間乃至二
時間ごとに、保温箱から子豚を出して、哺
乳させることが、標準技術であった。豚の
哺乳時間は一月で二回から二六回程度で
あるから、容易な仕事ではなく、また欲求
するだけ飲めない子豚は当然自然哺乳より
発育の停滞は止むをえなかった。分娩柵の
実施によって、授乳作業から解放され、さ



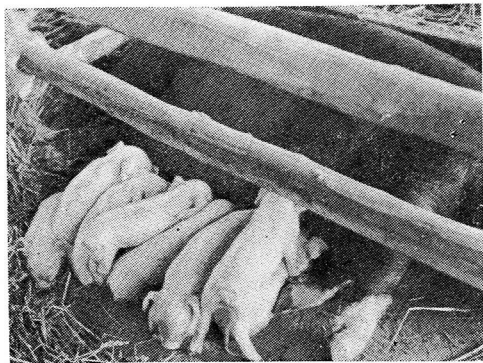
らにもう一つ前進し
て、分娩時に全然手
をくたさない、いわゆる
無看護分娩技術が研究
され、殆ど分娩介助の
場合と遜色のない成果
があげられている。無
看護分娩の方法は、分
娩柵の後方に、十分に

敷きわらを入れその上に赤外線電球を吊
り、分娩時の子豚が電球の下に集まり、胎
水を自然乾燥させ、外気温が寒い場合には、
予め準備してある保温箱中に、自然に求め
て入るようになるのである。その他の注意
として、子豚が迷って外へ出ないように、
母親の入っている分娩柵と、保温箱の外周
を低い板仕切りを立てることも併せて準備
する必要がある。畜産試験場の成績によれ
ば、育成率九四%になっている。最近進歩
した、繁殖豚多頭化時代への技術である。

② 寒さによる感冒、消化不良を防ぐために

寒冷時の出産が、子豚の発育や、その後
の飼料効率に著しい影響のあることを知り
ながらも、肉豚相場に対する、先行の不安
が、改善にブレーキをかけていたが、最近
は、次第に恒久的な対策を実施する生産者
が増加してきた。

子豚の適温は、生時三〇度C前後、一週
齢ごとに二度C位ずつ下げて七週齢で二〇
度Cは保ちたい。舎内温度を二〇度C以上
に保つことは、寒冷時においては困難であ
るから、寝室のみを保温する手段である。



丸太を利用した簡単な分娩柵、これで目的は十分はたせる

保温箱が普及して、内部給温に赤外線電
球、電熱マットの使用が常識化している。
さらに、保温時期を延長して、中豚（四〇
キ〜五〇キ）まで保温すれば、発育は促進
され、飼料効率も向上することが実証され
ている。畜試の成績では、床のみの保温で
は、さほどの発育に影響がなく、中豚にな
っても寝室の部分でビニールなどで囲っ
て、暖かい室で安眠させることが必要な条
件である。また同時に湿度や採光も発育に
影響があると考えられる。乾燥した敷わ
ら、排水良好な床面も発育におよぼす要因
であろう。冬期間日射しは、低角度である
ので、南面単別の豚舎であれば、太陽光線
の恩恵も無視できない。

環境が不良であると、体力が低下して、
下痢や感冒に冒される素因が問題である。

③ 貧血症の子豚をつくらない方法

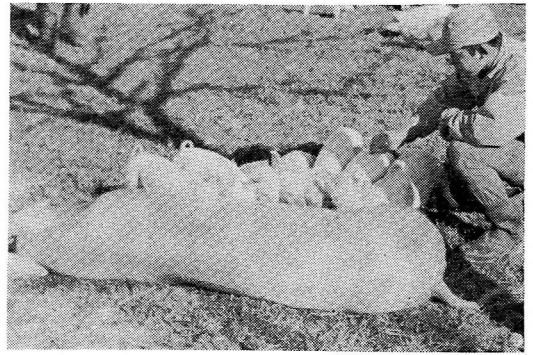
「子豚には土を採食させろ」と古くから言

われてきている。特に、出産時の体重が少なく、活力に乏しい子豚は、二週乃至三週齢に著しく、血液中の鉄色素が減少して、貧血症状となり、発育の停滞と同時に、下痢その他の疾病に冒され易くなる。これは、発育になって鉄分不足による増血ができないのであるから、その対策として、生後四日以内に、デキストリン鉄剤2cc一〇〇mgを、筋肉内注射をすることによって、この症状を防ぐ効果があることが実証された。

④ 下痢の直接の原因と治療法
 気候のよい時なら、母子共に放牧場にだして、太陽の下で自由に運動させ、同時に土から鉄分その他の微量成分を摂取されることは、また別の利益が考えられる。

下痢の多発する日齢は、生後二〜三日に、黄白色の急性下痢が発症する。この原因も種々あるが、敗血症型の大腸菌に因るものは恐ろしい。生後二週齢の下痢は、灰白色乃至黄色で、これも胃腸炎型の大腸菌に因る場合が多い。生後二週間時の母乳中に、病菌に対する抗体が消失する時期であり、子豚自身の抗体の発生するのは、四週齢頃になるので、その間は細菌に対するいわば無防備時期と言える。それ故、危しいものには、サルファ剤の投与、抗生物質の入った子豚用配合飼料を与えることも一策である。早くは、分娩豚舎の消毒や母豚と共に放牧する放牧地も、可能な限り、前述の如き悪性の病菌や寄生虫に汚染されないよう適当な消毒などの配慮が必要である。

⑤ 早期離乳の効果



放牧場で哺乳中の親子

子豚の離乳時期の決定は、離乳後の子豚の発育と、母豚側から考えて離乳時期の早晚が、次期の繁殖期にどう響いてくるかに因って決められるのである。

子豚の飼料も大変改良されて、人工乳もごく初期のものから、完全に成豚飼料に移行するまでに、段階的に配合され栄養学的にも検討されている。しかし離乳体重の大きい豚ほどその後の発育がよくなっている。特に早期離乳を図る必要はないが、離乳後の発育の停滞がないように、餌付日齢を二週間前後から開始して、子豚体重が一〇キ程度になり、ふんが粒状から、バナナ状に変わってからの適期と言える。その日齢はおおよそ三〇〜三五日齢である。

母豚は泌乳期間が長くなると、当然体重が減少してくるが、離乳時における母豚の

体重は、分娩時における母豚体重の七〇％程度に止めないと、離乳後次回の発情帰来が遅延することになり、年間分娩回数が標準値に達しないことになる。このためにも、早期離乳技術は、早期採食調教技術と言ってもよい。また極端な早期離乳は、母豚の子宮の回復時期が生理的にみて三週間必要であるから、意味のないことにもなる。

豚の人工乳が市販されはじめた当時は、母豚の事故によって、子豚への自然哺乳が不可能な事態が生じた際に、人工乳の哺乳によって解決できるが如き印象を与えたが、一頭一頭哺乳を覚えさせる如きことは尋常一様な努力ではできないことであって、家畜に付する愛情も、多頭化時代には、自ら限度があると思うのである。

⑥ 子豚は運動させる必要があるか

繁殖豚はいうまでもなく繁殖用の育成豚は、十分に運動をさせることが、将来育成成績をよくするうえに必要な条件と考えられてきた。しかし一般に肉豚の場合は、運動の必要性がないように考えて、子豚のときから薄暗い舎内で飼育することが多いが、ほんとうによいのは、四〜五ヵ月まで、過食を避け、運動場や放牧に出し、骨組を丈夫にするともに、胴のびのよい形として、その後肥育にかかる管理法であると思うのである。

これにはかなり反論もある。多頭化、省力時代では、全舎飼管理法と、一部放飼管理法とでは、前者を選ぶ説が強いけれども、豚は肉牛の如く、完成された体格の上

第1表

	100 kgに達するまでの日齢	1 kg増体に要する飼料
運動させたもの	生後 242日 (239~245)	4.65 (100)
運動させないもの	251日 (240~261)	4.94 (106)

(九州農試)

に肉や能筋を付けるのではなくて、発育の途中で肥育に移行すべき性格の肉畜と理解されるならば、五〇キ程度までは、放飼して、健康増進を図るように、施設や管理様式を組立てることが、原則と考えて間違いないと思う。

